

ペトリ工業株式会社 代表取締役 草間照夫 さんへのインタビュー

作者：2chペトリスレ リバースアダプタ

発行：2013. 11. 16

一部訂正：2013. 11. 25

本文書の無断転載、引用を禁じます。引用には草間照夫さん及びリバースアダプタの許可をとってください。

ペトリ工業株式会社 代表取締役 草間照夫 さんへのインタビュー

2013 年 11 月 2 日 埼玉県杉戸町のペトリ工業株式会社におきまして、 代表取締役 草間照夫さんにお話をお聞きする機会を得ました。

聞き手：2chペトリスレ リバースアダプタ、 我悪

お聞きできた内容をリバースアダプタの伝聞としてここにまとめます。



ペトリ工業株式会社 代表取締役 草間照夫 さん

ペトリ入社から解雇、復歸の経緯について

御出身は東京。ペトリには高校卒業して入ったが(昭和 41 年)、3 ヶ月で解雇されたそうです。(いわゆる 2 次闘争の始まり)

会社に入ってからすぐに労働条件がひどいと感じたので、周囲に組合無いの？組合を作ろうと話したりしていた。それとは別に組合を作ろうとしていた人たちがおり、会社が調べていて、それに草間さんの名前も入っていたため一緒にクビになったのだそう。その後に感化され運動することになったとのこと。

最初の配属は組み立てで、ラインに入っていたそうです。

この当時会社は組合を認めておらず活動を執拗に妨害されたとのこと。これ以前の昭和 32 年に大争議があり一度組合ができたが会社に潰されたそうです。(1 次闘争)

やめさせられたあと、会社が草間さんの家の周りにビラをまいたそう。当時は関係なかったのだが、共産党で赤でというんでもないという内容で、友達からは、おまえ何やってんだ？といわれたそうです。

解雇後は、地域労組に入ったというか、闘争活動のために作ったのだそう。他で解雇になった人が家を訪ねてきて、解雇撤回闘争をしないかと誘われそれから活動をはじめたそう。親元にいたのではなんと活動をつづけられたとのこと。

親御さんは反対していたそうですが、草間さんのお姉さんは、やりなさいと言っていたそうです。お姉さんは、法政大学に行っており、ちょっと左がかったいたので、だいぶ教育されたとのこと。

復帰されたのは 28 歳ぐらい。3 次闘争の委員長佐藤氏と 2 次闘争の時から連絡をとっていて、組合ができたらもどってくるかと話していたそう。草間さんは外から支援をしていたとのこと。3 次闘争で組合ができ、会社が了解して復帰したそうです。同時に解雇された人たちはすでに別の生活があり、戻らなかったとのこと。

復帰したころのペトリは、自然退社もあり人が減っていたそう。労働条件が悪く、やめる人が多かったのだそうです。

復帰時は組み立ての前組に配属。組合をやるのがわかっていたので、抜けても影響がないところがいいだろう、ということになったそう。もどったあとは、会社からの締め付けはなかったとのこと。

それでも組み立ての仕事は得意で、パートさんよりも早かったそうです。

当時本社工場で流していたのは FA-1、FTII、その後、MF-1 など、マイクロコンパクトも見ることがあるそうです。

ES-AUTO も見た気がするのでやっていたかもしれないとのこと。また、当時コシナへ外注はあまりしていないと思うとのことでした。

ペトリカメラの倒産について

管理職の給料の遅配があったので、カメラが危ないのはわかっていた、組合でも倒産したらどうするかを考えていたそうです。

倒産前夜、組合から当時の通産省に意見した件の本意は、技術競争というより、当時の一部大手カメラメーカーのリベートを使った強引な営業手法についてだった、とのこと。

末期にアメリカの販売契約を結んだ会社に変な会社で、約束した販売量は売らないのに、他に売ってはいけないということになっていたそうです。おかしい契約で倒産のきっかけになったとのこと。

柳澤常務、高尾専務、佐藤十蔵常務(敏夫社長の大学同期)が組合の交渉相手で、この 3 人で決めて社長が決済していたそう。敏夫社長は交渉にはでてこなかったとのこと。

柳澤さんはまじめな人で、会社をやっていくなら組合を認めて一緒にやっていくのが筋だろうと言ってくれていたそうです。当時大手カメラメーカーはすでに組合がありますよと上に提言をしてくれたが、その時は仕事を外されてしまったそうです。

組合ができた時点で、組合を取り込む協調路線がとれれば展開は違っただろうが、経営側は徹底した組合嫌いで組合も対抗せざるを得なかったそう。

倒産後、ペトリカメラのヨーロッパの営業の方が画策してコシナのカメラをペトリブランドで販売しようとしたのだそうです。不渡りを出してから売る物がないので、コシナにアプローチしたとのこと。

この方が組合で占拠した時にフィンカメラから何人か連れてきたり、組合が作るのなら何台か買うよと言う話もあったそうです。これは、不渡りを出して1ヶ月ぐらいの話だそうです。

また、今もペトリにフィンカメラの日本の代理店をやっていた方が営業の担当としていらっしゃるとのこと。

ヨーロッパのペトリ BV の方が先に倒産しているそうで、先にカメラを送っていて2億ぐらい未収になっていたそうです。

栗林家の人々

栗林家は組合にたいして最後まで非常に敵対的で、組合公然化後も組合主導者を懲罰的に異動したりするなどしてきたため、組合も対抗せざるを得ず、最後は栗林家が経営を投げてしまったので倒産は避けられなかったと考えられているようです。

和解の時、栗林家は何も出さなかったそうで、敏夫の世田谷の自宅の土地の半分为担保になっていて取られたが、それ以外は残ったはずとのことでした。

当時のペトリは人を育てるというより、儲け優先。最盛期は相当儲かったはずとのこと。前回のインタビューにもあったが、敏夫社長は銀行にも行ったことがなく、不渡りを出してはじめて銀行に行ったそうです。

弟の方はその筋の方々と付き合いのうわさがあり、遊んでいたそう。服装も派手だったとのこと。柳澤さんを飛ばしたのも弟の方だったようです。

繁代社長は子供の教育には失敗したのではないかとと思っているとのことでした。

(初出の小学校への車の送り迎えは、孫のエピソードとのことでした。)

しかし、母親の繁代社長は仕事では優秀だったと、柳澤さんから聞いているそうです。

戦後は繁代が栗林を切り盛りしていて、子供をおんぶして仕事をしていたような人だったとのこと。

設計がうまく行くと特別賞与をくれたりしたそうで、人望もあったようです。

自主生産について

倒産してからも、しかり品がけっこうあり組み立てていたそうです。

FTII、FT1000 やレンズシャッターもやったと言われていたので、マイクロコンパクトも倒産

後の組み立て品があったかもしれません。

MF-1 の組合の自主生産で部品を集めるのは大変だったそう。
債権者のところに行き、また部品を作ってくれと頼んでいるわけで、断られることも多かったようです。
組合を敵と思っている人、味方と思っている人、両方いたとのこと。

組合には課長以上はいないし、その下でやっていたのも減っていて、技術がないため、残っている資料に基づいてやっていたのだからうまくいかなかったそう。
原因は部品が変更されていたのだが、資料に載っていないためで、担当者は知っているが、自主生産のころには知っている人がいなくなってしまうためとのこと。
内部で検討してだいたいわかってきたが、生産再開を急ぎたかったので、最後は柳澤さんを直接呼んで聞いたそうです。

ゼニックスについて

ゼニックスを設立したのはペトリ出身者の方だったそうです。
カメラ倒産後、柳澤さんは大手カメラメーカーC社に誘われたが断ったそう。理由は大きい会社は部分しか担当できず全体を見られないからと語られていたとのこと。
それでゼニックスに行かれたとのこと。
ゼニックスに在籍されていたことがある前回のインタビューでお話を聞いた半田さん、今関さん、芦田さんの三人とは、草間さんも面識があるとのことでした。
お三人は柳澤さんの秘蔵っ子とのこと。
芦田さんはペトリ工業にきて、柳澤さんに技術的な相談していたこともあったそうです。

CF-35

ゼニックスも当時苦しく、組合から金も出して、柳澤さんの設計で共同開発したのだそう。
当時の委員長の佐藤氏とゼニックスの専務が知り合いだったこともあったとのこと。
初期から関わり、お金も出しているので、組合で作ったと言っていいんじゃないかということで、当時組合が開発したと宣伝したそうです。
実際にはゼニックスの社長と柳澤さんではじめたカメラだそう。
CF-35 にはペトリブランド以外にいろいろなブランドで売られていますが、それらはゼニックス側でやっていたことだったそうです。
CF-35 について、柳澤さんは、観音開きがやや閉じ加減になっている方がフードにもなり良いと言っていたそうです。

MF-10

MF-10 はお金がかからない程度のマイナーチェンジとして企画したそう。

ストロボが落ちるというクレームがあり、ロックをつける改良はしたそうです。MF-10は意匠以外は変更しておらず、MF-1と同じカメラとのこと。杉戸で組んでいたそうです。組み立てのパートは杉戸で採用したとのこと。レンズも50mmと45mmも杉戸で作っていたそうです。

フィルム室の印字は、年の末尾-月であっているそうですが、その前のアルファベットはわからないそう。

ペトリ工業時代の交換レンズは、三竹光学、地野光学、トップマンから買っていたそうです。トップマンからはストロボ、三脚も仕入れていたとのこと。

新型カメラの開発

MF-1/10の後継機としてネジマウントの新型一眼レフを計画していて、柳澤さんが図面を半分ぐらい書いたが、試作はしていないとのこと。

そのさらにあと、柳澤さんはフォーカルプレーンシャッターの新しい機構を考えていたそうです。

シャッターの先幕と後幕の間隔が固定されている全く新しい物だったそう。非常に簡単な構造で20年ぐらい前の話。

これも試作まではできていない。いつかやりたいと話していたが、メカシャッターなのでもうだめかもとも話したそう。

ペトリ工業になって1年後ぐらいの話ですが、ヨドバシに持っていったら、仕入れ値は2.5掛けで、さらに3モデルを一緒に持ってこいと言われたそうです。

ペトリブランドのシリーズを作らないとダメで、1機種だけでは売れないからとのこと。他でもよく同じことを言われたそうです。

3機種の開発は大変で資金も無い。見込みも1万台売れるかどうかだが、3万台売らないと採算があわない。カメラ生産は当時すでに赤字だったそうで、銀行が金を貸してくれる話もあったが、返せる見込みがたたなかったため、無理してやっても会社が潰れてしまうと断念したのだそう。

ペトリ工業は生産、技術(柳澤さん)は人がいたが、営業が弱かった。もし、営業が強ければ、他のやりようもあったかもしれないという思いもあるそうです。

ペトリ PT-1

ペトリで作った最後のカメラで、台湾で型を作り生産。柳澤さんの設計だったそうです。

5000台ぐらい作り、国内販売と輸出もして、ヨーロッパにも売ったそう。

国内は通販主体だったとのこと。前出の理由でヨドバシでは扱わなかったそうです。

台湾の会社と合併でやったが、向こうの社長がいうこと聞かなくて、写りが甘い問題があったがなかなか治してくれないので困ったそうです。

卸値も、チノンがほぼ同じ内容のカメラをさらに安く出してきていて、値段が崩れてきていて、これ以後の継続は断念したそうです。

4色のカラーバリエーションがあったとのこと。



ペトリ PT-1

その他の仕事について

自動着火タバコケースは製品化したがそれほど売れなかったとのこと。ペトリブランドは入っていたそうです。

キーストンの110 トイカメラのようなものは10万台ぐらい作ったとのこと。

設計と外観形状は柳澤さん、グラフィックデザインはキーストンの社長の奥様が担当されたそうです。

ペトリブランドの謎のカメラについて

4次闘争勝利記念の文字入り FT1000 は工場にあった仕掛品を、後になって組んだものだろうとのこと。足りない部品を準備して、だいが後になって組んだこともあったようです。

ペトリ CF-35 AUTO650 は見たことは無かったが、韓国のメーカーにレンズを売っていたことがあるので、そこが勝手に作ったカメラかもしれないとのこと。

ペトリ工業はレンズを、ゼニックスは部品を売っていたそうで、2年ぐらいレンズを売っていたとのこと。

ペトリ ST-F は見たことがないとのこと。かつてにペトリブランドを付けたコピー品のようにです。

現在のペトリ工業

現在、当時の組合員で残っているのは三人。杉戸では現在は何も作っていないそうです。中国の工場は 25 年前から生産しているそうです。前出の台湾のカメラメーカーと香港の会社の 3 社合併で始めたが、香港の会社が潰れたので、買い取ったとのこと。

事業の主力は、大手カメラメーカー 2 社向けなどの OEM の双眼鏡だそう。
大手カメラメーカー向けはデザインはメーカーから来るが、それ以外の双眼鏡大手への OEM などは柳澤さんがデザインまで手がけていたそうです。

大手カメラメーカー向けのベストセラーの小型双眼鏡(87 年?発売)は柳澤さんの設計でペトリ工業で生産した物とのこと。目幅調整が 2 軸式で対物レンズの光軸と同軸になっているのが柳澤さんの特許で、その他 6~7 件も特許をとっていたそう。
大ヒットして、当時は杉戸で作っていたが、作りきれず、納入先に他でも作って良いと許可したそうです。

この機種は双眼鏡に詳しくないリバースアダプタでも知っている機種で驚きました。機構からくるデザインも独自性があり、さすが柳澤さんと思わせます。柳澤さんは、双眼鏡の設計者としても大きな仕事をされていたのがよくわかりました。
他にもペトリ工業で開発された双眼鏡を複数見せていただきました。ペトリ工業は単なる下請け企業ではなく、独自の双眼鏡を開発して大手企業に OEM 供給するビジネスを展開されているようです。

ペトリの商標の件

ペトリの商標は、コシナに対してずっと返すように働きかけていて、最終的には買い戻したとのこと。

ペトリ株式会社は販売会社。販売会社なので、そちらが商標権を持つようにしていた。以前は、前出の元フィンカメラの日本の代理店をやっていた方が、所在地で営業していたが、今あの場所では営業はしていないそう。

双眼鏡は、ペトリブランドの物も、以前は発売していたが最近はやっていないとのこと。でも、商標の維持はお金がかかるが、続けているそうです。

ペトリブランドを生かしたい気持ちはあるが、双眼鏡だけだと営業経費がかさみ自社ブランドでは採算が取れないため厳しいのだそうです。カメラメーカーはカメラと一緒に売れるので採算をとりやすいとのことでした。



ペトリブランドの双眼鏡(現在は生産していない)

組合の闘争から、現在までを振り返って

じつは、組合のことは忘れて欲しいという思いもあるそうです。最近でも、当時のことを知らない若い方がペトリ工業と聞き、ネット検索すると組合の闘争の頃の話ばかりがヒットする(このスレの初期の書き込みなども該当します・・・)ため、困ることがあるとのこと。以前は組合だからと取引を断られることもあったそうです。

国内の商社でもペトリ工業と聞くと、組合だと言われて取り扱いしてくれないところがあったりしたとのこと。海外はそんなことはないそうですが。

以前、大手カメラメーカーと取引をはじめるときも現場とそういう話になりそうなことがあったそうですが、経営側に組合経験がある方がいらして、取引できることになったのだそうです。現在は、望遠鏡工業会の理事もなさっているそうです。もう長老の部類になってしまったとのこと。

自主生産時も、執行部、組合員、パートなど立場や考えの違う人がいるし、組合もいろんなセクトに分かれていてまとめて行くのはとても大変だったとのこと。また、収入を6割程度にしないと採算が取れなかったとも言われていました。

そのため会社が倒産する前、危ないと言われていた頃は、ユーゴスラビア的な自主生産管理に進む考えがあったし、自主生産時に外から見にきてそう言うていく方も多かったそうですが、その頃はすでに違うと考えていて、最終的には株式会社であるペトリ工業設立となったそうです。

本社工場は売られて債権者への返済にあてられたそうで、梅田に残らずに杉戸に来たのは、組合への風当たりを避ける意味もあったとのこと。

以上がお聞きした内容になります。

リバースアダプタの所感

草間さんは会社との闘争を指導した労働運動のリーダーということから想像されるのとは違って、大変穏やかで柔和な印象の方でした。

もちろん、会社との闘争と自主生産、ペトリ工業になってからのお話など、中身はとても厳しい内容なのですが、そんな中、ペトリ工業として現在まで会社を存続させてこられたのも、そのお人柄の故かと思います。

ペトリ工業は現代のメーカーとしてある意味普通の会社ですが、世の中のイメージには組合の激しい闘争のイメージが残っているということです。

それにはスレに書き込まれた不確かな書き込みも助長していることもあったかも知れず、申し訳なく思うとともに、このインタビューがそういったイメージを変えることに微力ながら助けになればと思いました。

最後に

草間さんにはお休みのところ出社していただき、しかも3時間近く話していただきました。貴重なカメラ、双眼鏡も見させていただきました。

草間さん、貴重なお話を聞かせていただき、まことにありがとうございました。

文責：リバーサアダプタ